

令和6年度マイスター・ハイスクール事業 成果発表会 講評シート

学校名(埼玉県立大宮工業高等学校)

1. 取組についての評価

- ・様々な活動(特別支援学校や台湾の高校生との交流を含む)を通じた生徒の成長を実感できる。
取り組みの社会的価値が誇りを育み、学校で完結しない技術の広がりや絆に気付かせ、そこから生まれた向上心と夢がある。
それらがコンピテンシー評価で見える化され、生徒と教師に成長の実感を与えている(スパイラルアップにつながる)。
- ・DX人材育成コンソーシアムと、市民県民への情報提供が良く連携している。
コンソーシアムと学校及び管理機関とのネットワーク強化が実現され、個と個の関係から組織間のビジョン共有になっている。
- ・学びの未来を見据え、新たな目標構築へ向かっている。
県教委報告にもあるように、最先端技術に触れた授業や現代社会の動向を学ぶ講演会等の効果が表れており、理工系進学校のカリキュラム・ポリシーにも活用できそうだ。

2. 今後の課題と考えられること

- ・自走化と持続的な発展のためにも、コンソーシアムや経営者協会・地域企業と学校で、育成する技術とその到達点を明確にしておく必要がある。
目標とベクトルを明確にしておかないと、数年後には担当者の変更等により形骸化する恐れがある。
- ・10年後の社会はどうなっているか、ICT技術はどう使われるか、そこで本校卒業生はどう活躍しているか、ぜひ検討して欲しい。
半導体やAIを設計する人、設計通りに作れる人、それを使いこなせる人、どこに比重を置くのか。
地域産業を担う人材にもとめる知識と技術は何か？大学との棲み分けも含めて検討してみたい。
- ・マイスター・ハイスクール事業での実践で得た教育効果を次の視点から検証してみたい。
 - ①高いレベルの技術目標を設定し、早い時期に到達点を見せることが、学ぶ目的と学ぶ必要感を育むのに効果がある。
 - ②目標となる師匠(マイスター)が常に身近にいるので、教科書と先端技術の関連を実態に基づいて知り、技術の多様性と応用展開事例を体験的に学べるのが魅力である。
 - ③STEAMに例えれば、専門高校ではTの修得から始まり、Engineeringに必要なSとMを探究していくのが良さそうだ。
(普通高校ではSとMからEngineeringに向かう)